

# たまのよこやま

文化財ウィーク特別公開

日本最古級の縄文遺跡

あきる野市前田耕地遺跡出土品

令和元年度企画展示

「ひと×いきもの」益々好評開催中!!



# 重要文化財特別公開報告



あきる野市前田耕地遺跡出土土遺物

## 日本最古級の縄文遺跡

東京文化財ウィークは、文化財をより身近に感じていただくため、毎年10月から11月の間、都内各所の文化財の特別公開や文化財関連行事等を行うものです。

当センターでは、初の試みとして、重要文化財前田耕地遺跡出土品の展示を行いました。さらに、当センター収蔵の都指定有形文化財から多摩ニュータウンNo.513遺跡1号窯出土品、同No.9遺跡出土土偶についても同時公開しました。



写真1 特別公開展示の様子

### 前田耕地遺跡出土品

前田耕地遺跡は、あきる野市に所在する複合遺跡です。縄文時代草創期の石槍やその未成品2,246点に加え、数十万点に及ぶ剥片（石器の製作時に打ち欠かれた小片）が検出され、これらは国指定重要文化財に指定されています。

遺跡からは、草創期の住居跡も2軒見つっています。このうちの1軒—17号住居跡から見つかった炭化物粒子について、最近東京大学のグルー

プによる年代測定が実施された結果、現時点で最古の縄文時代遺跡と考えられている青森県の大平山元遺跡（16,500年前）に次ぐ、15,500年前頃という結果が得られました。大平山元遺跡では住居跡が見つかっていませんので、本例が最古の縄文時代住居跡ということになります。この17号住居跡からは、土器も出土しています。文様もない小さな土器片ですが、大平山元I遺跡と並んで、日本列島における土器出現期の様相を明らかにする上で大変貴重な資料です。また、焼け土を伴って大量のサケの歯なども出土しており、遡上してきたサケを多数捕獲し、加工していたことも明らかになっています。



写真2 前田耕地遺跡17号住居跡出土の土器

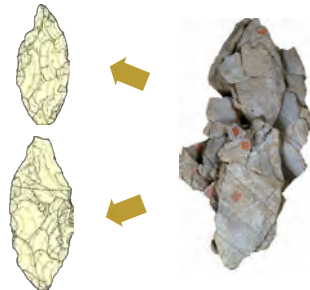


図1 石槍製作を示す資料



写真3 母岩別接合資料

石槍作りに関する資料も重要です。遺跡から見つかった石槍は、「木葉形」と「柳葉形」に大別されますが、遺跡内で製作されたものは木葉形が多かったようです。製作途中で放棄されたものも多く、石槍製作の難しさを物語っています。また、膨大な剥片を丹念につなぎ合わせていくと、石槍を製作した工程も復元することができます。

石槍のほかにも様々な石器が見つっています。弧状に挟り込んだ抉入石器は、石槍の柄を真っ直ぐに加工するために用いられたのでしょう。この他、搔器、削器、

せきすい  
石錐など、用途に応じて作り分けられた石器の内容からは、当時の暮らしぶりをうかがうことができます。



図2 さまざまな石器

### 多摩ニュータウンNo. 513 遺跡 1号窯出土品

No. 513 遺跡（稲城市大丸）は、多摩ニュータウンの東端、多摩川を臨む独立丘に立地しています。奈良時代の窯跡、中世の城郭（物見櫓）・経塚・板碑群関連の出土品が都指定有形文化財（考古資料）になっています。今回の展示では、奈良時代の初めに焼かれた1号窯出土須恵器に焦点を当てました。

遺跡からは15基もの窯跡が見つっています。大半の窯は、武蔵国分寺造営のための瓦を焼いていましたが、最も古い段階に操業していた1号窯では須恵器も焼いていました。蓋を伴う大小の碗・碗、脚のつく高坏などの供膳具の他、瓶、甕、さらには硯なども焼かれており、その内容から、主に役所に供給することを目的とした生産と考えられます。実際、これを裏付けるように、武蔵国府の遺跡からも同様の須恵器が出土しています。



写真4 多摩ニュータウンNo. 513 遺跡 1号窯出土須恵器

### 多摩ニュータウンNo. 9 遺跡出土土偶

No. 9 遺跡（稲城市若葉台）は、多摩丘陵の中でも有数の規模を有する縄文時代中期の集落遺跡です。出土品も多数見つかっていますが、特に土偶は101点と都内最多の出土数を誇ることから、一括して都指定有形文化財（考古資料）となっています。今回、常設展示を併せて全点同時に展示される初の機会となりました。

No. 9 遺跡の土偶は、「背面人体文土偶」と呼ばれています。全国的には土偶の出土数が減少する縄文時代中期後半に盛行したものです。関東地方南西部から中部地方にかけて分布しますが、各地域によって差異も認められ、No. 9 遺跡を含む関東地方南西部は、小形で足が省略されるという特徴があります。また、本遺跡例は、顔の表現が省略されたものが大半を占めること、胸や腹などに刺突文が施されたものが多いことなど、多摩ニュータウン内の他の遺跡と比較しても際立った特徴があります。（佐藤悠登）



写真5 多摩ニュータウンNo. 9 遺跡出土土偶（常設展示）



写真6 多摩ニュータウンNo. 9 遺跡出土土偶（全点展示）



日本に「団地」が登場したのは大正時代頃とされますが、建設が相次ぐようになるのは戦後の昭和30年代に入ってからのもので、都市の住宅不足を解消するために各地に数多くの団地が生まれました。赤羽台団地もそのひとつで、東京都の北東部、北区赤羽台に位置しており、戦前・戦中にこの地にあった旧陸軍の被服本廠の敷地が戦後米軍に接收・返還されたのを経て、当時の日本住宅公団によって建設されました。23区内初の大規模団地として、1962年の入居開始以来、長年にわたり人々の住まいとなってきました。

独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構）による赤羽台団地の改築に伴って調査されている道合遺跡は旧石器・縄文・弥生時代から奈良・平安時代を中心とする遺跡です。平成18年から開始された発掘調査は、周辺の範囲等を含めて今回が第9次となり、これによって道合遺跡のほぼ全域の調査が終了することとなります。

今回の調査は今年度から令和3年度にかけて、赤羽台団地の南側と東端の約37,100 m<sup>2</sup>を対象に行うもので、今年度はそのうちの約12,000 m<sup>2</sup>を調査しています。これまでのところ、縄文時代の炉穴<sup>ろあな</sup>の他、弥生時代や奈良・平安時代の集落跡の南端にあたる<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡などが検出されました。

団地の南側は荒川低地に臨む見晴らしのいい高台の縁辺にあたり、ここには「スターハウス」と呼ばれる、上から見るとY字型に見える特徴的な住棟が、取り壊しを免れ保存されています。この付近を調査したところ、南側に奈良時代の竪穴建物跡が検出され、そのほぼ真下から、縄文時代早期の炉穴がまとめて発見されました（写真1）。周辺から出土した土器（写真2）は細隆起線と沈線を組み合わせた文様が特徴的な野島式土器で、縄文時代早期後半、今から約7,000年前のもので、付近にも同様の炉穴が分布しており、道合遺跡で見つかった炉穴は通算81基となりました。興味深いことに、炉穴はスターハウスの立地と重なるように台地の南側の縁辺に沿って分布しています。この夏の酷暑のなかでも涼しい風が通り抜けていたこの付近は、縄文時代においても、生活の適地としてしばしば人々の往来があったのでしょう。

赤羽台のスターハウスは戦前から戦後にかけて活躍した建築家、市浦建によって設計された、当時の公的住宅としては先駆的なデザインのもので、近年はこうした団地の建物も歴史を物語る「文化財」とする考え方も広がりつつあります。住まいや暮らしのあり方は大きく変わりながらも、赤羽台の地には人々の生活の歴史が刻まれ続けていきます。

（鈴木伸哉）



写真1 縄文時代早期後半の炉穴群周辺の3D画像。



写真2 縄文時代早期後半の炉穴群。スターハウス（左奥）南側に位置し、奈良時代の竪穴建物<sup>たてあな</sup>の下から検出された。



写真3 縄文時代早期後半の土器（野島式）。

多摩ニュータウンNo. 520 遺跡は、稲城市若葉台（当時は稲城市坂浜）及び多摩市聖ヶ丘<sup>ひじりがおか</sup>に所在し、多摩ニュータウン調査事業地の東端部に位置する、縄文時代中期の集落跡を中心とした遺跡です。当遺跡の東方約 1 km には、No. 9 遺跡やNo. 471・473 遺跡などが点在するなど、周辺にも縄文時代中期の集落跡が密集していることも特徴の1つです。本遺跡は周辺では最も高い標高約 155m の尾根頂部付近に立地していることから、都心部や横浜市街地、西には富士山を一望できます。2004 年に遺跡北側に完成した「みはらし緑地」も観光スポットとなっており、ここから縄文時代の風景を想像するのにも一興です。



写真1 No. 520 遺跡の中期住居跡群

# 1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

# 42 多摩ニュータウン No. 520 遺跡

本遺跡は 1975 年から発掘調査が開始され、断続的に調査されてきました。今回取り上げた第 5 次調査（実施面積約 8,000 m<sup>2</sup>）は 2001 年 7 月から 2002 年 1 月まで行われました。その成果は多岐にわたり、旧石器時代のナイフ

形石器や縄文時代草創期<sup>ゆうげつせんとうき</sup>の有舌尖頭器<sup>ゆうげつせんとうき</sup>なども出土しました。6,000 点以上の遺物の出土した前期後半<sup>だてあなしゅうきよあと</sup>の竪穴住居跡 1 軒は、少なくとも 5 回以上の建て替えが行われていました。縄文時代中期に関しては住居跡 17 軒の他に、集石、焼土跡、土坑、ピットが検出されています。さらに、古代の土坑や近世以降の炭焼き窯も検出されるなど、トピックスがいくつもある遺跡でした。

今回は「入れ子土器」を取り上げたいと思います。尾根頂部の落ち際にあった縄文時代中期の遺物集中地点（いわゆる“土器捨て場”）から深鉢<sup>ふかばち</sup>（現代でいうところの鍋）が 2 個体、入れ子状になって検出されたのです。当然のことながら、2つの土

器は同じ時代に使われたことになります。いずれも縄文時代中期の半ばころの勝坂 3 式期<sup>かつさか</sup>の土器ですが、器形や文様が全く異なります。外側の土器は、大きな三角形の突起を持ち、対には渦巻状<sup>うずまき</sup>の把手が配されており、器面<sup>うずまきもん</sup>に渦巻文<sup>うずまきもん</sup>、沈線文<sup>ちんせんもん</sup>、爪形文<sup>つめがたもん</sup>等

が組み合わせられ、複雑な様相を呈しています。内側の土器は、底部が高い位置で強く屈曲する土器で、頸部に楕円形渦巻文<sup>けいぶ</sup>が施文され、口唇部<sup>くちんぶ</sup>には刻み目があり、口縁部<sup>こうえんぶ</sup>は無文、そして胴部には縄文が施文されています。どうして、このように全

く違う土器を入れ子にしていたのでしょうか？いまだに解けない謎です。

No. 520 遺跡の発掘・整理はおよそ 20 年前、40 代の私は還暦を過ぎた今と比べ疲れ知らずで、発掘現場を文字通り飛び回っていたことを覚えています。足の踏み場のないほど出土した縄文土器は、縄文人の活力を感じさせてくれました。（金持健司）



写真2 入れ子状態で検出された縄文土器

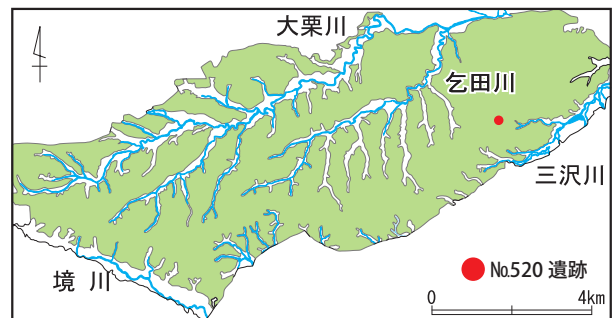


図1 多摩ニュータウンNo. 520 遺跡位置



# かゆい所に手が届く

## 遺物の基本的な見方 縄文土器編⑦

展示室にある縄文土器。その多くは土器という名前の通り、「うつわ」の形をなした状態で並べられています。しかし実際の発掘調査では、土器は割れた破片の状態出土することがほとんどで、ヒビひとつない完璧に出会う機会は滅多にありません。そこで今回は、土器片を「うつわ」に復元する重要な作業である「<sup>せつごう</sup>接合」に注目してみましょう。

発掘調査で出土した土器は、表面の土を洗い落とし、破片一つ一つに出土した場所などの情報を書き込んだのち、接合作業に移されます。すべての破片が一か所からまとまって出土するとは限りませんので、同じ個体の土器片を探すために、まずは膨大な数の土器片を観察してパズルのピースを見つけることから始まります。次に、集められた土器片は接着剤で接合されますが、厄介なことに長年土の中で埋まっていた土器は土圧の影響などによって微妙な歪みが生じています。そのため、破片どうしの角度を調整しつつ、細心の注意を払って組み上げていきます。すべての破片が揃って出土するとは限りませんので、どうしても見つからず空白となった箇所には、最後に石膏や樹脂を埋め込んで補強します。こうした気の遠くなるような接合作業を経て、縄文土器は「うつわ」の形となって展示されるのです。

さて、土器の接合は「うつわ」の形を復元するためだけでなく、考古学においても重要な意味を持っています。土器が破片となって埋まった理由はさまざま考えられますが、接合した破片それぞれが出土した場所どうしを時間的・空間的に結びつけることができるからです。多摩ニュータウン遺跡群では、大規模な粘土採掘坑が見つかったNo. 248 遺跡と、約 250m 離れた集落のNo. 245 遺跡の出土土器片が接合しました。これによってNo. 245 遺跡の人びとが粘土を採掘した可能性が極めて高いことを証明することができました。まさに点と点が線になった貴重な事例と言えます。

離れて見るときれいな縄文土器。近くで見るとヒビだらけの縄文土器。土器のヒビから接合作業の気苦労、そして破片一つ一つの来歴に思いを馳せることも、縄文土器のツウな見方の一つと言えるでしょう。

(大網信良)



a. 接合された状態



b. 出土した状況



c. 土器内面には無数のヒビが…

No.920 遺跡出土の縄文土器 (後期・<sup>しょうみょうし</sup>称名寺式)



a.No.245 遺跡とNo.248 遺跡 (★が土器の出土位置)



b. 土器の展開図面と破片の出土位置



c. 接合された状態

遺跡間で接合した縄文土器 (中期・<sup>そり</sup>曾利式)



## 夜の部隊、再び！

11月 <sup>なみえ</sup>浪江町鹿屋敷遺跡発掘現場は対策の効果が薄れ、再びあちこちに「ホリホリ」の跡が目立つようになった。新しい調査区は重機による表土剥ぎが進み、イノシシの大好きな「葛の根」<sup>くず</sup>があちこちに顔を出した。葛の根は柔らかい黒土に根を伸ばしたがる。実は黒土のあるところは、古代人たちが暮らしていた<sup>はいげつ</sup>竪穴住居の跡である場合が多い。住居が<sup>はいげつ</sup>廃絶すると、残された土器や石器の上に、黒土や柔らかい土が徐々に<sup>たいせき</sup>堆積し、最後は完全に埋まる。埋まった住居跡を調査するのが筆者らの仕事である。従って、「発掘調査者」→「古代住居が好き」、「葛の根」→「古代住居の黒土が好き」、イノシシ→「葛の根が好き」という構図が成り立つ。結果的にイノシシは古代住居を掘っている。しかも、昼は人が、夜はイノシシが掘るという完全分業体制である。イノシシ部隊が多いほど、発掘がどんどん進むという結論になる。そうはいかない。竪穴住居跡の中には貴重な土器や石器が埋まっている(写真1)。我々は、こうした遺物を図面や写真に記録する。ところがイノシシは遺物に興味はない。夕方、大事に残した土器は大きなシートで養生しておく。しかし、部隊はシートの中にも侵入し、夜の発掘をはじめ。土器は嫌い、好きなのは葛の根。大事に残した土器の周りの土は掘り「くづ」され、踏みつぶされる。翌朝、シートをそっと開けてみると土器片が散乱し、「くづされた！」と落胆するのである。写真をとり、土



写真1 古代竪穴住居跡から出てきた土器

層観察用の土手を設定し、あとは掘り始めるだけと準備した竪穴住居が、夜の発掘隊に先を越されていたこともあった(写真2)。



写真2 夜の発掘部隊が掘り返した古代の竪穴住居跡

ある日、現場代理人さんが、作業中に突然叫び声をあげた。藪の中が、がさがさするので振り返ったら、イノシシが「にゅー」と顔をむけていた。「目」と「目」があった、と。両者ともびっくりだ。当人、当日の終礼の際に、「明日から俺は、作業中はラジオをかけて仕事する」と宣言(熊ならわかるが?)。

12月 夏の頃に比べてイノシシの掘る穴は大きくなり、個々の戦闘能力は着実に向上している。再度イノシシ部隊の遺跡内横断事件が起きた。午後4時30分、現場代理人が笛を吹く。これを合図に遺跡のシート掛けが始まる。それを待っていたかのように、今度は東から西へ、お母さんを先頭に大きくなった子供達5・6匹が列をなして爆走する。最後尾の子供は出遅れたため躊躇し、一度出てきた藪に戻ろうとした。が、再度思い返してUターン。必死の形相で中間の消えた西の藪に突っ込んでいった。まるで漫画のシーン。横断地点は前回とほぼ同じ。この場所は「けものみち」に当たっていたのだ。

筆者は3月末をもって帰任し、かわりの調査研究員が出向した。鹿屋敷遺跡は今年度も調査を行っている。部隊は元気になっているか少し気になっている。(及川良彦)

おわり 



写真3 1月。雪でも遺跡内を闊歩





# ひと×いきもの

令和元年度企画展示解説 2



## 「縄文犬とは」



「ひと×いきもの」、今回は秋に開催された文化財講演会「ここまで分かった！縄文犬」（講師：佐藤孝雄氏 慶應義塾大学教授）の内容から、縄文犬と縄文人について紹介します。

まず、縄文犬とはどのようなイヌだったのか。骨から分かる特徴は、体高は40cmほどで、現代のイヌと比べ頭蓋骨の額段がなだらかであること、眼窩が後方に傾斜し、頬骨の位置が高いこと、下顎骨の咬筋窩が深いことなどが挙げられます。姿については、縄文時代のイヌらしき動物形土製品から推測するに立ち耳・巻尾であったようです。簡単にいうと「吊り目で鼻面の長い、たくましい柴犬」といった感じでしょうか。

では、縄文犬はどう使われていたのか。結論から言うと「一様ではない」ということになります。貝塚で散乱骨として出土する例もあれば、住居跡から埋葬骨として出土する例もあります。また解体痕をもつ骨がある一方で、骨折の治癒痕をもつ骨もあります。つまり、人に飼われ、死後埋葬されるイヌもいましたが、食料として食べられていたイヌもいたのです。

では、現在展示されている縄文犬はどんなイヌだったのか。展示されている2体は愛媛県上黒岩岩陰遺跡から出土した縄文時代早期末（約7,200年前）のイヌです。埋葬された状態で、人骨の近くで見つかりました。頭蓋骨・下顎骨には生前欠歯（生きている間に歯が抜け、治癒し歯槽が塞がった痕）が見られ、歯が抜けた理由はイノシシなどに噛みついたためと考えられています。炭素・窒素安定同位体分析による食性復元では、埋葬骨は人骨と近い値を示しました。これらのことから、上黒岩岩陰遺跡の埋葬犬は狩猟犬として飼われ、人と同じような物を食べ、死後は人の墓域近くに埋葬されたと考えられるのです。

文化財講演会では最新研究について話していただきました。当日の資料はホームページに掲載されているので、ぜひそちらもご覧ください。（高田優衣）



動物形土製品

写真1 立ち耳・巻尾の表現された縄文時代の土製品

（出典：財団法人文化振興事業団 1999『藤岡神社遺跡（遺物編）』栃木県埋蔵文化財調査報告 197）



写真2 上黒岩岩陰遺跡出土 埋葬犬骨



写真3 上黒岩岩陰遺跡出土埋葬犬 生前欠歯（矢印箇所）の様子

※今号の表紙：北区道台遺跡で検出された縄文時代早期の炉穴群。左側には煉瓦造りの旧陸軍被服本廠の建物基礎が見える。



たまのよこやま 119

東京都埋蔵文化財センター

2019年12月27日発行

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tef.or.jp/maibun/>